

ディケンズとマルサス 『冷酷な時代』における統計学批判

中村 隆

I

イギリスにおける統計学の母体となったのは、「英国科学振興協会」(British Association for the Advancement of Science)である。この団体は、当時の先端科学であった地質学の勃興を背景に、「有益な知識の普及」と「科学の新発見を促進する」ために1831年に設立された。¹それから数年して、その下部組織として「統計学部門」が、1833年の6月に発足する。これに対し、イギリスの文豪ディケンズ(Charles Dickens)は、彼が編集した雑誌『ベントリーの雑録』(Bentley's Miscellany、以下『ベントリー』)において、1837年と1838年の二度にわたり、「英国科学振興協会」と統計学を痛烈に皮肉る記事を載せた。それは「英国科学振興協会」を想起させる架空の科学振興の年次大会に『ベントリー』の特派員が出席し、その模様を雑誌に逐一報告するという体裁を取っている。そこに登場する学者の名前に、すでにディケンズの当時の科学および統計学へ向けられた批判の一端が窺われる。例えば、動植物学部門の会長の名は「いびき教授」(Professor Snore)で、副会長は「うたたね教授」(Professor Doze)と「ぜんそく教授」(Professor Wheezy)であり、統計学部門の大御所は「なめくじ氏」(Mr. Slug)である。²

プーヴィー(Mary Poovey)は、この『ベントリー』の記事にふれ、ディケンズは透明な客観性を標榜する統計学の中に、偏向した道德観念を押しつける欺瞞を見抜いていたと指摘する。³ここでのプーヴィーの議論は、ディケンズにおける統計学への態度を分析したのものとしてはかなり本格的な論考となっているが、1854年に週間分冊として刊行されたディケンズの『冷酷な時代』(Hard Times)が「全面的な統計学批判」の書としての一面を持つにもかかわらず、プーヴィーは、この小説にほとんど言及していない。さらに、『冷酷な時代』と統計学の関係についてこれまでディケンズ研究者はあまり論じてこなかったという批評的沈黙の傾向が認められる。かりに、論じられた場合でも、その言及はごくわずかであるのみならず、批評家によって意見が分かれている。例えば、レイモンド・ウィリアムズ(Raymond Williams)は、ヴィクトリア朝を代表する思想家であるカーライル(Thomas Carlyle)の『時代の兆候』(Signs of the Time)との比較においてディケンズの『冷酷な時代』を論じている。『時代の兆候』は1829年にカーライルが『エディバラ・レビュー』(Edinburgh Review)に発表した論文であるが、ウィリアムズは、両作品とも「工業主義」("industrialism")によってもたらされた悪弊によって啓発され、「イギリスの現状という問題」

("Condition of England question")に取り組んでいることを指摘した上で、次のような趣旨の意見を述べている。「ディケンズは『冷酷な時代』でカーライルと似かよった主張をしているが、両者には人間のまじめさという点で本質的な違いがあり、ディケンズは統計学をただ茶化しているだけである。他方、カーライルは統計学が証拠を提出し、合理的な調査を促し、それが立法議会で役立つことを望んでいた。」⁴つまり、ウィリアムズはディケンズの『冷酷な時代』における統計学批判が、カーライルのそれに比べるといかにもふまじめで、統計学をただ茶化しているだけであり、首尾一貫した理性的な批判が欠落していることを指摘している。その一方で、歴史学者のブリッグズ(Asa Briggs)は、『冷酷な時代』に関して、ディケンズは必ずしも統計学を無意味だと決めつけていたわけではなく、統計学に依存しすぎる態度を批判したにすぎないと述べている。メイスン(Michael Mason)もブリッグズの見解にほぼ従っている。⁵

まず、ウィリアムズのディケンズ批判について見るなら、彼の指摘はある程度まではあっている。なぜなら、ディケンズが統計学や統計学に由来する数字や事実への絶対的な信仰を有する人間をただ単に揶揄し、皮肉っているとしか思えない場面が作品の中に無数に存在するからである。具体例を挙げると、『冷酷な時代』の冒頭部でグラッドグラインド(Thomas Gradgrind)が町の学校の先生と生徒を前に訓示を垂れる場面がある。

"Now, what I want is, Facts. Teach these boys and girls nothing but Facts. Facts alone are wanted in life. Plant nothing else, and root out everything else. You can only form the minds of reasoning animals upon Facts; nothing else will ever be of any service to them. This is the principle on which I bring up these children. Stick to Facts, sir!" (I, Ch. 1, 1)

ここで、グラッドグラインドは「私に必要なのは、事実である。これらの少年、少女に事実以外を教えるはならぬ」と演説を始め、「事実」("fact")という言葉を繰り返し、ついには「事実にしがみつくだ!」と、生徒と教師たちをほとんど恫喝する。またこの事実万能主義のグラッドグラインドは、事実のアンチ・テーゼである空想("fancy")を嫌悪しており、作中で地味だが重要なヒロイン役を演じるシシー(Sissy Jupe)が、「妖精や、子鬼や、せむしや、精霊など」と口にする、グラッドグラインドは彼女に「やめんか。もうたくさんだ。そのようなおぞましい無意味な言葉をもう二度と使ってはならぬ」と一喝する(I, Ch. 7, 37)。さらに、グラッドグラインド家では、「～かしら」("I wonder")という言葉は禁句であり「不思議に思うな」("Never Wonder")と題された章では、語り手は次のように言う。「不思議なことなど何一つない。足し算も、引き算

も、掛け算も、割り算もある。そうすれば、いずれ何とかケリはつく。だから、不思議など絶対ない」(I, Ch. 8, 38)。このように、ディケンズは、事実や数字を過信する人物を狂信的人間として戯画化し、また統計学の言説の周辺をこき下ろす。他方、シシーのように花が好きだから「花模様のカーペット」が欲しいと思う人物を描くことによって、またスリアリーサーカス一座のグロテスクな団員たちを登場させることによって、空想を擁護しているように見える。

しかし問題は、冷徹な「事実」に対する、ロマンテックな「空想」の一方的な擁護といった単純な二項対立で決着できるようなものではないように思われる。なぜなら、ディケンズは統計学に対し、カーライルほどの広い視野や冷静な姿勢はなかったかもしれないが、ただ闇雲に統計学をこき下ろしたとは思われぬからである。つまり、ディケンズにおける統計学批判には、ある明確な戦略があったと考えられる。そこで、私はこの小論で、ディケンズにおける統計学批判の戦略の実態を、『冷酷な時代』という作品に即して分析したいと思う。そしてどのような方法を用いて統計学を批判し、あるいは茶化し、最終的にディケンズが統計学に対しどのような態度を取ったのかについて考察したい。先述したように、プーヴィー、ウィリアムズ、ブリッグズ、メイスンらの先行研究は統計学との関連において『冷酷な時代』を必ずしも十分に論じてきたようには思われぬ。しかし、この作品は、ディケンズと統計学との関係を論じる際にきわめて重要な作品として位置づけることができることを示したいと思う。

II

まず、具体的な批判の方法や戦略を見ることにする。『冷酷な時代』におけるディケンズの統計学批判には大別すると二つの方法がある。その第一は、比喩的言語を用いることによって、統計学やそれにまつわる存在を痛烈に皮肉るといふかなり直接的な攻撃手段である。

ディケンズの小説の言語的特質が、メタファやメトニミーといった比喩形象にあるということは広く批評家が指摘している。また『冷酷な時代』において、比喩への傾斜や比重が特に大きいということも一致した見解となっている。ディケンズにおける比喩の研究史はそれなりに膨大な遺産を形成しているので、以下に簡略にディケンズ批評における比喩の研究を振り返ることにしたい。その先鞭をつけたのは、ヴァン・ゲントで、彼女は、ディケンズのメタファが擬人法を駆使してできていることを明らかにした。またディケンズのメトニミーの重要性にいち早く着目したのがストウアーである。ディケンズの比喩の研究においては、基本的に、ローマン・ヤコブソンの記念碑的な研究の成果を踏まえているものが多いが、ヤコブソンは、小説におけるリアリズムは、属性や

細部を綿密になぞっていくメトニミー的な言語と親和性があり、他方、ロマン派や象徴派の詩は飛躍した意外な意味が対象に読み込まれるのでメタファ的な言語からなると述べた。これを受ける形で論を進めたヒリス・ミラーは、ディケンズのリアリズムが比喻を多用しすぎることによって崩れること、およびディケンズの作品ではメタファとメトニミーが渾然一体となって判別できないことを指摘した。一方、ディヴィッド・ロッジはヤコブソンを継承して、メトニミーが意味の置き換えであり、メタファにおいては文脈、つまり意味の一連のつながりが重要であることを明らかにした。そしてディケンズがメタファを駆使した時、作品は成功すると述べて、メタファの優位性を指摘している。さらに、スペクターは、外面を描くことによって内面を暗示するというディケンズの得意とするメトニミーの手法が、『冷酷な時代』において破綻していると述べた。ギャラガーは、『冷酷な時代』は「メタファについてかかれた書物である」と規定し、この作品のテーマを掘り下げた。彼女によれば、ディケンズが『冷酷な時代』を書いた時、家庭と社会をめぐる対立する二つの議論があった。一つは理想的な社会は平和と安寧によって築かれる家庭を模して作られるべきという「家庭主義のイデオロギー」("domestic ideology")である。他方、社会は家庭を守る父とそれに従う息子のように堅い主従関係より出来上がると考える「家父長制のイデオロギー」("paternalistic ideology")があった。この二つのイデオロギーが意味していたのは、家庭は社会を、そして社会は家庭を模倣するという相互にメタファ的な関係であった。ギャラガーは『冷酷な時代』が後者の「家父長制のイデオロギー」を採用し、理想的な社会の手本として強大な父とそれに従う家族を想定しているとするが、実は、小説は、その家父長制よりなる家族(グランドグラインド家)が内部で崩壊していく様を描いており、その意味で、『冷酷な時代』は家庭と社会を結びつける制度的なメタファがそもそも機能できないことを示している。こうしてギャラガーは、この小説の構造を根底から解体("deconstruct")した。また、カーズは、細部をリズムカルに丹念になぞる連鎖的なメトニミーが、『冷酷な時代』においてしばしば分断させられていることを指摘している。その断絶をもたらし、作品をリアリズムからシュール・リアリズムに変換するのが当時の小説のパターンから逸脱する「反体制的な("subversive")」新しい女性ルイーザ(Louisa)である。⁷

ところで、筆者は以前、スモーレット(Tobias Smollett)の『ハンフリー・クリンカー』(Humphry Clinker, 1771)を論じ、比喻(特にメタファ)と諷刺の密接な関係を論じたが、⁸ ディケンズのこの作品においても、比喻は諷刺として機能するという、ある種の法則性が観察できる。数字や事実を過信する人間や、統計学的言説の産物(例えば、物語の舞台の、コークタウン[Coketown]という工場都市)を愚弄する時、比喻は有効な攻撃(諷刺)の武器として機能してい

る。

その具体例として次のような場面を見てみたい。

THOMAS GRADGRIND, sir. A man of realities. A man of facts and calculations. . . . Thomas Gradgrind now presented Thomas Gradgrind to the little pitchers before him, who were to be filled so full of facts.

Indeed, as he eagerly sparkled at them from the cellarage before mentioned, he seemed a kind of cannon loaded to the muzzle with facts, and prepared to blow them clean out of the regions of childhood at one discharge. He seemed a galvanizing apparatus, too, charged with a grim mechanical substitute for the tender young imaginations that were to be stormed away. (I, Ch. 2, 2)

ここで、グランドグラインドは、現実主義者で、事実と計算だけを信用する人間であることがまず明確に述べられる。その時、彼の学校の生徒たちはあふれる大量の事実を受けとめるための「水がめ」である。事実をギリギリと「詰め込む("grind")」事実万能主義のグランドグラインドは、「先端まで事実という弾が詰め込まれた大砲」にたとえられる。その大砲はたった一発で、子供の世界を「ふっ飛ばす」ことができる威力を誇る。彼はまた「電気ショックを起こす機械」のようにも見えた。その機械は「若い柔らかな想像力」に置き換わる「陰気な機械的な何か」で充満している。この場面の描写では「置き換え」("substitute")という言葉に示されるように、擬人法とは逆の手法が使われている。人間であるグランドグラインドは、大砲になり、次に電気ショックを起こす機械になる。他方、人間である学校の生徒は、水がめになる。このように、人間をものに、あるいはものを人間に、メタファを用いて置き換えることによってディケンズは滑稽やおかしみを演出し、大砲や電気ショックの器具に化身したグランドグラインドをからかう。

また、ハードな教育家であるグランドグラインドと、ヴィクトリア朝の模範であった「天佑自助("self-help")の精神によって立身出世した、貧乏自慢をならわしとする起業家バウンダビー(Josia Bounderby)⁹ という二人の典型的な実利主義者に支配されるコークタウンの工場都市は不気味な動物の比喻によって描写される。

The Fairy palaces burst into illumination, before pale morning showed the monstrous serpents of smoke trailing themselves over Coketown. A clattering clogs upon the pavement; a rapid ringing of bells; and all the melancholy mad elephants, polished and oiled up for the day's

monotony, were at their heavy exercise again. (I, Ch. 11, 53)

小説の舞台であるコークタウンという工場都市の朝の陰鬱な情景が寓意を用いて鮮やかに描写されるこの場面の比喻もきわめて諷刺的な要素を持っている。機械の支配する事実万能主義の象徴である工場は、朝もやの中で「妖精の宮殿」にたとえられ、それは「光ではじける」。始業のベルが鳴り響き、工場労働者たちの木靴が舗道とぶつかりあう音が聞こえてくる。やがて、工場の煙は「とぐろを巻く怪物のようなヘビ」になり、工場のピストン運動をする蒸気エンジンは「磨かれ、油を差された、狂った憂鬱なゾウ」のように動き出す。こうして工場の「単調な一日」が始まる。ここでは、ものが動物に置き換えられるという点で、擬人法をわずかにずらしたメタファが使われている。工場は、光り輝く妖精の宮殿であるが、そこにいるのは、妖精ではなく、怪物のようなヘビや、狂った憂鬱なゾウである。こうして想像力の飛翔する場であるはずの妖精の世界は暗転し、一瞬にして、陰気な工場都市が出現する。あるいは、明け方の空に浮かび上がった光輝く陰鬱な工場と、不気味な妖精の世界とが夢幻的な交替を交わしあう。いずれにしても、比喻が諷刺の効果的な武器になることをこの場面は示している。

この工場都市コークタウンには図書館があるが、事実しか信じないグラッドグラインドは、人々がそこで何を読むかについて心配していた。

Mr. Gradgrind greatly tormented his mind about what the people read in this library: a point whereon little rivers of tabular statements periodically flowed into the howling ocean of tabular statements, which no diver ever got to any depth in and came up sane. It was a disheartening circumstance, but a melancholy fact, that even these readers persisted in wondering. They wondered about human nature, human passions, human hopes and fears, the struggles, triumphs and defeats, the cares and joys. . . . They sometimes after fifteen hours' work, sat down to read mere fables about men and women, more or less like themselves. . . . They took De Foe to their bosoms, instead of Euclid. . . . (I, Ch. 1, 38)

図書館にあふれているものは「表になった表現物」、すなわち統計資料である。それが定期的に「小さな川」となって「怒涛渦巻く資料の海」である図書館に注いでいく。その海の深みに潜った「潜水夫は、いまだかつて一人も発狂せずに帰ってきたことはない。」一種の水のメタファとでも言うべき比喻が引用部の前半を支配し、洪水のように図書館に押し寄せる統計資料を皮肉っている。

これは、時代背景的に見てもあながち誇張した表現ではない。なぜなら、19世紀中葉は「統計資料の時代("age of Blue Books")」と言われるほど、政府の各種委員会の膨大な量の統計資料が発行され、時にはベストセラーになる統計本が出たほどだからである。¹⁰ 引用の後半部はグラッドグラインドの思惑とは裏腹に、工場労働者たちが15時間の労働の後に「男と女の他愛もない物語("fables")」を読んでいることが語られている。彼らが胸にひしと抱くものは、古代ギリシアの大数学者のユークリッドの本ではなく、18世紀のイギリスの小説家デフォーの作品だった。ユークリッドで数学や数字、そしてその延長にある統計学を暗示し、デフォーで物語や空想、そして想像力を表わす手法は、特殊で一般を指示する「代喩法("synecdoche")」である。シネクドキーは、メトニミーとほぼ同類と見なしうるから、ここで、ヒリス・ミラーが言うように、メタファとメトニミーの混在があるのかもしれない。また、比喩とは別の次元で、ここでの15時間の労働という言葉にも特別の注意を払っておくべきだろう。なぜなら、ここに1833年の「工場法("Factory Act")」への、皮肉なあてこずりが見られるからである。この工場法は、織物工場における児童の労働に対して年齢と時間の制限を設けたが、一方で、労働者の強い要求だった10時間労働を満たすことはできなかった。¹¹ また、コークタウンのモデルとされるマンチェスター¹²が当時のイギリスの綿工業の一大中心地であったことを考え合わせるなら、15時間労働という言葉は、1833年の工場法の不備を批判した記述と受け取れることは明白である。実際、『冷酷な時代』のサブ・プロットに登場する工場労働者ブラックプール(Stephen Blackpool)はバウンダビーの経営する織物工場で働いている。つまり、労働者たちは、工場で15時間もの単純肉体作業に従事していたこと、そしてその疲れを慰めたものは、無味乾燥な数字や統計ではなくて、他愛もない物語であったことをこの短い一節は雄弁に語っている。

コークタウンの図書館をあふれさせていた統計資料はまた、グラッドグラインドの書齋全体を覆いつくしていることが語られる場面がある。

Although Mr. Gradgrind did not take after Blue Beard, his room was quite a blue chamber in its abundance of blue books. Whatever they could prove (which is usually anything you like), they proved there, in an army constantly strengthening by the arrival of new recruits. In that charmed apartment, the most complicated social questions were cast up, got into exact totals, and finally settled - if those concerned could only have been brought to know it. As if an astronomical observatory should be made without any windows, and the astronomer within should arrange the starry universe solely by pen, ink, and paper, so Mr. Gradgrind, in his Observatory (and there are many like it), had no need

to cast an eye upon the teeming myriads of human beings around him, but could settle all their destinies on a slate, and wipe out all their tears with one dirty little bit of sponge.

To this Observatory, then: a stern room, with a deadly statistical clock in it . . . Louisa repaired on the appointed morning. (I, Ch. 15, 73)

先に見たように、この小説の執筆の前後、つまりヴィクトリア朝の中期は「ブルー・ブックス」と呼ばれる統計資料が氾濫した時代であった。それは1832年の選挙法の改正、1833年の工場法の改革、1834年の新救貧法といった一連の政治改革がなされた1830年代以後、すべての改革を論議する場として各種の「王立委員会」("Royal Commission")を用意する制度が出来たことと関連している。1849年には実に100を超える「王立委員会」があったことが知られているが、これらの委員会は、国会議員と、政治経済学などの当該分野の専門家によって構成されていた。その代表的なものが、1832年の2月にグレイ(Earl Grey)内閣によって、救貧法改正を目標として設立された委員会である。この王立委員会の書記を務めたのが、ベンサム(Jeremy Bentham)の弟子であり、また1842年に出版された『労働者階級の衛生報告』で有名なチャドウィック(Edwin Chadwick)だった。また、この委員会には、すぐれた政治経済学者のシニア(Nassau Senior)も含まれていた。このように、この時代に乱立した各種の委員会は、政治制度の改革を論じるにあたり、徹底的な調査を実施し、それを(統計)資料にまとめて広く社会に配布した。¹³ こうして矢継ぎ早に生み出された各種の王立委員会の統計資料は、コークタウンの図書館に洪水のように押し寄せ、グラッドグラインドの書斎を埋め尽くしたのである。彼の書斎は、統計資料(ブルー・ブックス)に染まった「青い部屋」である。この「青い部屋」を埋め尽くすのが統計学の「青い本」であり、さらにその部屋では、「死んだような統計学的な時計」が時を刻む。そして、その部屋の住人は、事実のみを信仰するグラッドグラインドである。こうして、部屋という外面とその部屋の住人の内面を徹底的に一致させ、作者は不気味な統計学の部屋を仕立て上げる。さらにこの外面の呈示により内面を表象するというディケンズ特有のメトニミー的な手法に加えて、この場面では統計学を揶揄するために二つのメタファが使われている。一つは、軍隊のメタファとでも呼ぶべきもので、日々嵩を増していくグラッドグラインドの書斎の統計資料は軍隊("army")になぞらえ、毎日補充されていく新しい資料は新兵("recruits")にたとえられる。もう一つは、天文学のメタファである。語り手によれば、グラッドグラインドの書斎は「天文台("astronomical observatory")」に似ている。そして「天文学者がペンとインキと紙だけで天の星の世界を思い描く」のと同様に「グラッドグラインドは無数の人間を見るこ

となく、多数の人間の運命を石板の上に書きつけ、彼らの涙をひと拭きで消してしまふ。」この天文学のメタファには統計学のある言説に対する皮肉が込められている。というのも、あとでもふれるように、統計学の一つの重要な目的は、国勢調査("census")¹⁴ という人口の調査に端的に示されるように、人間の行動の普遍的傾向を研究し、予測することだったからである。例えば、マルサス(Thomas Malthus)が『人口論』(An Essay on Population)で述べているように、結婚することによって生活が苦しくなるという見込みがあれば、人は結婚を控える傾向を示す(これをマルサスは「道徳的抑制("moral restraint) 」と呼んだ)。結婚すれば貧乏になるという見込みが立つ時、概して人口は食料の供給を超えて増大している。そして、限られた食料を多数の人間で分けあっているので人々(特に、労働者階級)の生活は困窮している。逆に、疫病や飢饉、また結婚の抑制によって人口が減り、食糧に余裕が生ずるなら、その余分な食料の分だけ、今度は人口は増える。すなわち、人口はシーソーのように振幅を繰り返し、バランスが取られる。このようにイギリスにおける統計学の祖とも言えるマルサスに示されるように、統計学は人間の行動を「平均化」し、グラッドグランドがしているように、人間の運命を蓋然性のもとに予測する。そしてその統計学を支える基礎がグラッドグランドの信奉する数字である。ここでは、人間は多様な感情に支配される個として捉えられるのではなく、あくまで平均的で、均質な集団として考えられるのであり、したがって、グラッドグランドは多数の人間の個々の「涙」には興味がないのである。グラッドグランドの書斎の場面において、天文学のメタファは、マルサスという祖型に発する統計学の言説を露わにし、皮肉っている。

III

以上見てきたような、メタファとメトニミーという比喩的言語を駆使することによって皮肉ったり、諷刺したりするやり方とは別に、統計学を批判する第二の方策がある。それは、第一の比喩による直接的な批判の方法とは異なり、間接的で巧妙なやり方である。この時作者は、攻撃しようとする対象の議論の中に敢えて入り込み、その論理の矛盾を露呈させ、対象のイデオロギーそのものをその内部より批判し、根底からくつがえそうとする。そしてこの第二の戦略を介して、本格的な統計学のイデオロギー批判が小説の中で展開されると考えられる。

まずは当時の統計学の議論の中心概念を再確認しておきたい。すでに見たように、当時の統計学の議論はある意味で単純な構造を持っていたとも言える。ブリッグズ、プーヴィー、そしてメイスンらが指摘しているように、¹⁵ あらゆる現象の「数値化」と、その延長線上にある人間(像)の「平均化」がいわゆる

統計学の中心的学説であった。つまり、統計学の公式は、「数字」と「平均」の二つの項目よりなる。これに関して、ディケンズは『冷酷な時代』出版後、あまり時を経ずして書かれたある書簡の中で次のように述べている。「私が批判したいのは、数字と平均以外をまったく見ようとしない人間だ。……このような空虚な人間たちは、クリミアで、毛皮を着ていても凍死するような夜に、クリミアの寒さの一年の平均気温をもとに兵士に木綿の衣服をあたえようとするのである。」¹⁶ ディケンズはこのように述べて、統計学の二つの主要項目を的確に批判している。

この数値と平均からなる統計学の公式を、ディケンズが小説に取り込んだと思われる箇所がある。それは、ルイーザに彼女の父のグラッドグラインドが、金持ちの資本家バウンダビー（彼は銀行家であり、また工場経営者である）から結婚の申し込みがあったことを伝える場面である。結婚の申し込みがあったことを聞いたルイーザは父に尋ねる。「お父さん、私がバウンダビーさんのことを愛していると思っているの？」父のグラッドグラインドは愛という言葉聞いてひどくまごつく。娘のルイーザはかさねて冷静に尋ねる。「お父さんは私にバウンダビーさんを愛するようにと頼んでいるのかしら？それとも、バウンダビーさんが私に彼を愛してくださいと、頼んでいるのかしら？」それを聞いた父はおよそ次のように答える。「ルイーザ、それに答えるのは難しい……。なぜなら、問題になっていることはそういう表現とは関係がないからだ。バウンダビーさんはそういう空想めいた言葉や無意味なことや、感傷的な言葉を使うようなことをしない人だ。そういう言葉は今ではふさわしくない」(I, Ch. 15, 74-75)。父は敢えて「愛」という言葉を避けて、「その表現("the expression")」とだけしか言わない。「それでは、どういう言葉を使ったらよいの？」と聞き返すルイーザに対し、父のグラッドグラインドは結婚統計を持ち出し、得々として、次のような長広舌をふるう。

". . . Now, what are the Facts of this case? You are, we will say in round numbers, twenty years of age; Mr. Bounderby is, we will say in round numbers, fifty. There is some disparity in your respective years, but in your means and positions, there is none; on the contrary, there is a great suitability. Then the question arises, Is this one disparity sufficient to operate as a bar to such a marriage? In considering this question, it is not unimportant to take into account the statistics of marriage, as far as they have yet been obtained, in England and Wales. I find, on reference to the figures, that a large

proportion of these marriages are contracted between parties of very unequal ages, and that the elder of these contracting parties is in rather more than three-fourths of these instances, the bridegroom. It is remarkable as showing the wide prevalence of this law, that among the natives of the British possessions in India, also in a considerable part of China, and among the Calmucks of Tartary, the best means of computation yet furnished by travellers, yield similar results. The disparity I have mentioned, therefore, almost ceases to be disparity, and (virtually) all but disappears." (I, Ch. 15, 75; italics mine)

ここで、父のグランドグラインドまず、事実だけを見よと娘に語りかける。そうして、この結婚問題に関する一つの大きな問題点として、ルイーザとバウンダビーの年の差を取り上げる。ルイーザが 20 才で、バウンダビーは 50 才である。しかし、この年の差は二人の結婚の障害にならないことを証明するために、グランドグラインドはあたかも伝家の宝刀のように、イングランドとウェールズで得られた「結婚統計」を持ち出して次のように言う。「年が相当離れて結婚している率はきわめて高いのだ。その場合、花婿の方が年上であるのは全体の四分の三以上だ。しかもこのような年の離れた結婚というのはかなり普遍的な法則だ。実際、この法則はイギリス統治下のインド領の人間にも、中国でも、さらにタタール地方の西蒙古人にもあてはまるのだ。」結婚に際して、年の差は関係ないということを行うために、父は「結婚統計」に言及し、数字を提出し、普遍法則に言及する。さらにインドや、中国や、西蒙古という例を列挙する。つまり数値化とそれに付随する具体例の羅列によってグランドグラインドが言おうとしていることは、ルイーザがかなり「平均的な」花嫁足りえるということである。このような数値からはじき出される平均化は、結果的に統計学と「環境決定論("environmentalism")」の宥和をもたらした。¹⁷ 環境決定論は、人間の運命は環境に左右されると考える。あるいは生まれた時の環境から人間の運命を予測しようとし、統計のデータをもとに、環境から平均的な人間像を導きだそうとする。この数値化と平均化と環境決定論という一連の統計学の概念を武器にして、父は、20 才の娘に、50 才のバウンダビーとの結婚がふつうで、しかも運命づけられたものであるかのように説く。そして、「これで年の差という問題はほぼ解消した」と結論づける。

この結婚統計を持ち出したグランドグラインドはイギリス 19 世紀に甚大な影響を及ぼした人物を想起させる。言うまでもなく、それは『人口論』で人口と結婚の問題を徹底的に論じたマルサスである。イギリスの 18 世紀末から 19

世紀初頭にかけていわゆる「人口論争("population questions")」があったが、それはイギリスの産業革命との深い関わりの中から生じたと考えられている。1780年から1800年にかけてイギリスの産業は急速な成長を遂げ、それに伴い、人口も急速に増大した。そしてその人口の増大とともに、貧民層の拡大が顕在化し、人口に関する問題は国家の存亡と直結する問題として認識されるようになった。¹⁸ 人口論争に関しては、簡単に言うと二つの異なった議論があった。一つは、1790年代のゴドウィン(William Godwin)に代表される楽観主義的な主張である。ゴドウィンは私有財産を否定する共産主義的ユートピア論者で、彼は文明が進むにつれて人間の理性も進歩し、性欲は理性に支配されると考えた(彼のユートピア論では、すべての財産が共有されるが、配偶者もその例外ではなく、通常の婚姻制度はなくなる)。¹⁹ あるいは知識欲は性欲を凌駕すると考え、したがって、心配されるような人口の爆発といった災厄は起こらないと考えた。それに対し、イギリス国教会の聖職者でもあったマルサスは、まさしく数学と統計を理論的根拠とし、きわめて冷徹な現実を呈示した。そこから、およそ次のような趣旨のマルサスの有名な主張が生まれる。

人口は抑制されないなら、25年で倍増する。言い換えれば、人口は等比級数的に増える。しかし、食糧の増産率はよく見積もっても、算術級数を超えない。したがって、食料の増大を超えて増えようとする人口には抑止力が働く。この人口を抑止するものとは、疫病、戦争、飢饉などの積極的抑制である。これに結婚すれば生活が困窮するという見込みのもとに結婚を控える予防的抑制、すなわち道徳的抑制が加わる。²⁰

ブリッグズも指摘しているように、人口論争に関しては、ゴドウィンのような楽観論よりも、数字と事実を積み重ね、理路整然と論じたマルサスの現実主義の方がより多くの支持を受けたと考えられる。²¹ それは、1798年にその初版が出版されたマルサスの『人口論』がその後も、最終的に1826年の第6版が出版されるまで、改訂をかさねながら30年近くも出版され続けたという事実だけを見ても推測できる。

興味深いのは、ディケンズの『冷酷な時代』でマルサスが一回だけ言及されることである。それはグラッドグランド家の子供の一人の名前がまさしくマルサスだからである(I, Ch. 4, 16)。²² もっとも、グラッドグランド家の子供の中で物語に登場し続け、重要な役割を担うのは、ルイーザと、バウンダビーの銀行で働く彼女の弟のトムだけであり、ここではまったく表面的な結びつきにすぎないが、しかし、ルイーザの結婚問題との関連でマルサスとこの小説は深い関係を取り結ぶ。マルサスは『人口論』の1803年の第2版で「道徳的抑制」という新機軸を導入した。それは先述したように、賢明な男性ならば、結婚することによって現在の生活水準が維持できない、あるいは結婚することで

財政的に窮乏し、結果として一家を不幸に落とし入れるという見込みを持つならば、結婚を遅らせるか、結婚そのものを避ける、という主張である。そして、文明化された国ならば、男性は、このような理由から人生の早い段階で一人の女性と結婚して「自然の命令に従うこと」（つまり、子供を多数産むこと）を回避すると述べている。²³ 言い換えるならば、マルサスはここで文明国における男性の晩婚化を奨励し、あるいは予言していると考えられる。ところで、ルイーザとバウンダビーの結婚に際して、父のグラッドグラインドが最大の障害となりうると考え、結婚統計を引き合いに出し、必死に弁明これ努めたのは二人の間の 30 才もの年の差だった。バウンダビーは、「天佑自助」と「立身出世」をまさに体現する成り上がったブルジョアであり、工場経営者にして、銀行家である。もはや、結婚することによって、財政的に窮乏することはほとんどありえない。そして、彼は若い美貌のルイーザに求婚することになった。しかし、ここまでたどり着いた時、彼の年齢はすでに 50 才になろうとしていた。つまり、マルサスの奨励した晩婚の一つの究極的な具現がバウンダビーの結婚である。そして、このバウンダビーの晩婚を正当化するのが、父グラッドグラインドが依拠したイングランドとウェールズの結婚統計であった。この結婚統計を利用した論証が、数字と具体例の羅列であったことはすでに見た通りであるが、この数字と具体例による強力な傍証方法こそがマルサスが『人口論』で取った手法に他ならない。『人口論』は版をかさねる度に、具体例を膨大に積み上げていったことはよく知られている。そして具体例の記述は、世界各地の場所を引き合いに出すことが多かった。例えば、マルサスは人口がどのように増えるのかについてふれ、北アメリカ植民地、ヨーロッパ、中国、日本、アジア、アフリカ、タタール人、黒人の例を次々に挙げている。²⁴ グラッドグラインドもまた、イングランドとウェールズのみならず、インドや、中国や、西蒙古を引き合いに出して、年が離れた結婚が多いこと、その場合、花婿が年上になることが多いことを力説している。つまりルイーザの結婚に関して、小説は完全にマルサス的な手法（晩婚の奨励と具体例の列挙）を踏んでルイーザを説得した。ディケンズが小説に取り込んだ統計学のイデオロギーとは、より特定するならマルサスの結婚をめぐるイデオロギーに他ならなかった。

ルイーザは、決して、このような父の説得を喜々として受け入れたわけではない。しかし、彼女を特徴づける性質は、無感動であり、この結婚統計を父に突きつけられた時も、彼女は特に目立った反応を見せずに、それからほどなくして、彼女はバウンダビーと結婚する。こうして、小説において、マルサス的な結婚が成就する。それは厳密な統計学に裏打ちされ、『人口論』で推奨された男性の晩婚であった。統計学のイデオロギー、あるいはマルサスのイデオロギーはこのようにしてバウンダビーとルイーザの結婚という形で取り込まれ

ることになったのであるが、この時から、作者ディケンズの徹底的な統計学批判、およびマルサス批判が展開される。なぜなら、小説はここから長い時間をかけて、この結婚が朽ち果て、瓦解する様を執拗に描くことになるからである。このマルサス的な統計学から生まれた平均的であるはずの結婚が破綻する直接的な引き金となったのは、彼女の冷たい美しさに惹かれた頹廢的なドンファン、ハートハウス(James Harthouse)がルイーザを誘惑しようとしたためである。彼は年は35才頃で、兄が国会議員という名門の出で、その兄とのつながりで国会議員のグラッドグラインドの知己をえて、コークタウンにやってきた。そしてルイーザに会い、彼女を手に入れようと画策する。ルイーザもまた如才のない美男のハートハウスの甘言に心が揺れ動く。

しかし、ルイーザとハートハウスの仲が熟するのを、虎視眈眈とつけ狙うものがあつた。バウンダビーが結婚するまで彼の身の回りの世話と家事の切り盛りをしていたオールドミススパースィット(Mrs. Sparsit)である。彼女は二人が結婚してからは、バウンダビーの所有する銀行の二階に住んでいた。そして彼女は鋭い直感で、ルイーザとハートハウスの怪しい仲を察知する。そしてこの二人が不倫の仲になり、駆け落ちをし、結婚が破滅するのを今か今かと待ち望むことになる。そして、二人が予想通り、親密の度合いを増すのを見てほくそえむ。この物陰でほくそえむスパースィットに、私たちはおそらく、作者ディケンズの意地の悪い視線を重ね合わせることができるだろう。なぜなら、彼はわざわざマルサス的な統計学に依拠した結婚をルイーザとバウンダビーの間で成立させたが、それはあとでじっくり壊すためにそうしたと考えられるからである。統計学の結婚のイデオロギーをいったん取り込み、それが自然に崩壊する様を、いたぶるように眺めるとというのが『冷酷な時代』の一つのプロットを構成する。マルサスと統計学を批判する作者の心理が投影されたスパースィットは、ルイーザとハートハウスの中の仲の進行状況を以下のような冷たい目で観察する。

Mrs. Sparsit saw James Harthouse come and go; she heard of him here and there. . . . she kept her black eyes wide open, with no touch of pity, with no touch of compunction. . . . Mrs. Sparsit had not the smallest intention of interrupting the descent. Eager to see it accomplished, and yet patient, she waited for the last fall, as for the ripeness and fulness of the harvest of her hopes. Hushed in expectancy, she kept her wary gaze upon the stairs; and seldom so much as darkly shook her right mitten(with her fist in it), at the figure coming down. (II, Ch. 11, 156-57)

息を殺してほくそえむスパークが待ち望んでいる「最後の転落」、そして「黄金の収穫」とはルイーザがハートハウスと駆け落ちし、ルイーザとバウンダビーの結婚が破滅することだった。しかし彼女の期待は半分だけ達成される。というのも、ルイーザはコークタウン近郊のバウンダビーの屋敷から出奔はするものの、最終的には思いとどまり、ハートハウスの待つところにはゆかず、実家の父のもとを訪れるからである。それは雷鳴が轟き、洪水のように雨の降る夜のことだった。突然、グランドグラインドは出奔してきた娘ルイーザの来訪を受ける。ルイーザは父に「この部屋で私たちが最後に話をした時のことをおぼえているかしら？」と尋ねる。それは父が結婚統計を持ち出して娘を説得した時のことをさしている。そして、ルイーザは父に初めて自分の胸の中にわだかまっていたものを吐露する。自分は、生まれながらにして優しい自然な感情を奪われて育てられたこと、また、男たちが作る「計算」や「算術」の犠牲になってきたこと、そして自分が嫌っていた男性を夫として選ばれたこと、など、ルイーザは延々と恨み言をつらねる。父は「お前が不幸だったなんて知らなかった」と言い、自分の鈍感さをさらけ出す。しかし同時にそれはグランドグラインドが心の奥に秘めていた優しさを娘に示した瞬間でもあった。ルイーザはしかし、父を許すことができず、抱きかかえようとする父に「私を抱かないで！」と言い放ち、床にどっと倒れて気絶する。そしてグランドグラインドは「彼の誇りと、彼のシステムの栄光が無感覚の塊となって、足元に転がっているのを見」る(III, Ch. 1, 167)。かくして、グランドグラインドの「システムの栄光("the triumph of his system")」はついでるのであるが、この時、小説の中で周到に用意された計画　マルサス的な統計学の帰結である理想的な晩婚の計画　も崩壊する。もとよりそれは仕組まれた挫折だった。統計学に基づく理想的な結婚をプロットの中心に埋め込み、それを時限爆弾であるかのようにして作動させ、内部崩壊させることが、作者の統計学批判のための最終計画だったからである。ディケンズは、作品の結婚のプロットに統計学のイデオロギーの必須項目である「数字」と「平均」(平均的人間像)を取り込み、そして具体例の列挙というマルサスの得意とする言説を巧妙に模倣した上で、そこから生まれる統計学の理想的な結婚を粉碎した。このようにしてディケンズは、作品の中で長い時間をかけて、統計学が推奨する晩婚が破滅に至る過程を丹念に描きだした。それは、近代統計学に曙光をもたらしたマルサスの大著『人口論』に痛烈な一撃を放った瞬間でもあった。

註

- 1 当時の地質学の隆盛は、化石の発掘というヴィクトリア朝の中産

階級において流行した趣味と関連していた。イグアノドンを発見した医師のマンテルのような素人の化石研究者の出現もこのような事情が背景にある。さらにディケンズの『荒涼館』(1852-3)の有名な冒頭部に恐竜が現われることも当時の化石ブームを物語る。Peter Bowler, *The Invention of Progress* (Oxford: Blackwell, 1989); Asa Briggs, *The Age of Improvement 1783-1867* (1959; London: Longman, 1979) 480 参照。

2 Michael Slater ed, *Dickens Journalism: Sketches by Boz and Other Early Papers 1833-39 Vol. 1* (London: Dent, 1994) 513-51.

3 Mary Poovey, "Figures of Arithmetic, Figures of Speech: The Discourse of Statistics in the 1830s," *Critical Inquiry* 19 (1993): 256-76.

4 Raymond Williams, *Culture and Society 1780-1950* (1958; Harmondsworth: Penguin, 1961) 85, 91.

5 Asa Briggs, "Human Aggregate," *The Victorian City*, ed. H. T. Dyos and Michael Wolff (London: Routledge, 1973) 83-104. Michael Mason, *The Making of Victorian Sexuality* (Oxford: Oxford UP, 1994) 232-33.

6 参照したテキストは、Charles Dickens, *Hard Times*, ed. George Ford and Sylvere Mono (New York: Norton, 1966)。以下、『冷酷な時代』のテキストにはこの版を用い、() 内に巻、章、頁の順で数字を記す。

7 Dorothy Van Ghent, "The Dickens World: A View from Todgers's," *Sewanee Review* 58 (1950): 419-38. Roman Jakobson, "Two Aspects of Language and Two Types of Aphasic Disturbances," *Fundamentals of Language* (The Hague: Mouton, 1956) 67-96. Taylor Stoehr, *Dickens: The Dreamer's Stance* (Ithaca: Cornell UP, 1965). J. Hillis Miller, "The Fiction of Realism: Sketches by Boz, *Oliver Twist*, and Cruickshank's Illustrations," *Dickens Centennial Essays*, ed. Ada Nisbet and Blake Nevius (Berkeley: U of California P, 1971) 85-153. David Lodge, *The Modes of Modern Writing* (London: Edward Arnold, 1977) 103. Stephen J. Specter, "Monsters of Metonymy: *Hard Times* and Knowing the Working Class," *ELH* 51 (1984): 365-84. Catherine Gallagher, *The Industrial Reformation of English Fiction: Social Discourse and Narrative Form 1832-1867* (Chicago: U of Chicago P, 1985). Katherine Kearns, "A Topology of Realism in *Hard Times*," *ELH* 59 (1992): 857-81.

8 Takashi Nakamura, "Tropes and Satire in *Humphry Clinker*," 『山形大学紀要』第13巻第4号(1997年1月) 163-79 参照。

9 バウンダビーは自分の「立身出世」を強調するために、出自に関して「どぶで生まれ、豚小屋で寝た」などと、でまかせを言う (I, Ch. 4, 12)。

10 Briggs, *The Age of Improvement* 275. 同時にこの時期はほぼ同

様の理由から「チャドウィックの世紀 ("the age of Chadwick")」とも呼ばれていた。Briggs, "The Human Aggregate" 95.

11 Briggs, *The Age of Improvement* 281.

12 『冷酷な時代』はディケンズが編集した週刊雑誌『お馴染みの言葉』(Household Words)の1854年の4月1日号から、同年の8月12日号にわたって掲載された。『お馴染みの言葉』の1853年の12月17日号に、マンチェスターの図書館を扱った記事が掲載されているが、バトウィンは、読者はこの小説の図書館の部分と、マンチェスターの図書館の記事と重ね合わせて読んでいないと述べている。ヨークタウンのモデルとしては、マンチェスター近郊の綿工業の町であるプレストン(Preston)であるとも言われているが、ディケンズは特定の町をモデルにしたものではないと言っている。Joseph Butwin, "Hard Times: The News and the Novel," *Nineteenth-Century Fiction* 32 (1977): 166-87, esp. 174-76.

13 Briggs, *The Age of Improvement* 274-81, 334 参照。

14 イギリスで最初の国勢調査が行われたのは1801年で、この頃から本格的な統計学が始動したと考えられる。Briggs, *The Age of Improvement* 32 参照。

15 注の4と6を参照。

16 Dickens's Letter to Charles Knight (January 30, 1855), *Hard Times* (Norton) 277.

17 Poovey 268-70, Mason 240-58 参照。

18 マルサスに先行する類似の考え方は、すでに、1752年にヒュームが『古代国家の人口に関して』の中で述べている(David Hume, *Of the Populousness of Ancient Nations*)。Briggs, *The Age of Improvement* 15-7, 32 参照。

19 Donald Winch's Introduction to T. R. Malthus, *An Essay on the Principle of Population*, ed. Donald Winch (New York: Cambridge UP, 1992) XV. 以下のマルサスの『人口論』への言及はすべてこの版による。

20 この箇所は『人口論』の第一巻の主張を要約して記した。Malthus 13-29 参照。

21 Briggs, *The Age of Improvement* 34.

22 ここで、マルサスと並んでもう一人の子供の名前が出るが、それはアダム・スミス(Adam Smith)である。

23 Malthus 21-22.

24 Malthus 16-18.

The subject of Dickens's involvement with statistics has received scant attention. But it is evident, I should think, that his *Hard Times* (1854) rather overtly criticizes the ideology of statistics, an example of which is Malthus's influential politico-economical work, *An Essay on Population* (1798). In the novel Dickens caricatures such protagonists as Gradgrind and Bounderby who believe only in such "Hard" things as facts, figures and "Blue Books" of the "Royal Commissions." As elsewhere in Dickens's novels, in *Hard Times*, tropes, or metaphors and metonymies are of significance since those tropes function as an agency to lampoon the person who is obsessed with statistical facts and figures.

The novel also lays bare the defect that the discourse of Malthusian statistics inescapably gives rise to. According to Malthus, man should refrain from marriage until he is convinced he can maintain his family in a more or less wealthy condition. This constraint on early or rash marriage is called by Malthus "preventive check" or "moral restraint." Bounderby, who is a bourgeois banker and owner of a large factory, succeeds in a Malthusian marriage at the age of fifty. The bride is Louisa, young and pretty, but she is cold-hearted because her education consisted of hard facts and figures. As a consequence, this Malthusian marriage proves to be a failure due to lack of love, despite abundance of money. Having escaped from her husband, Louisa is faced with her father Gradgrind and protests against him, for her father persuaded Louisa that the marriage between her and Bounderby was not unnatural but ideal because the "statistics of marriage" in the world endorses such a Malthusian marriage between an old, wealthy husband and a young, pretty wife. The novel in this way presents us with falseness of statistics by showing that Malthusian marriage supported by Victorian statistics cannot stand but fails.

本稿は、『山形大学紀要』(人文科学)第14巻第1号(1998年)PP. 187-203に掲載されたものを電子テキスト化したものである。

